

平成 22 年 6 月 9 日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2008～2009

課題番号：20820012

研究課題名（和文） 現象学的分析と言語分析との融合による自我の研究

研究課題名（英文） A Study of Ego from the Viewpoints of Phenomenology and Analytic Philosophy

研究代表者

吉田 聡（YOSHIDA AKIRA）

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教

研究者番号：90451781

研究成果の概要（和文）：本研究では、世界へと関わる主体としての自我のあり方について考察を行った。ここでは、主に現象学という哲学的な立場から考察を展開しつつ、それに「私」という言葉の用法に関する分析を導入することによって、多角的な観点から自我の存在を明らかにすることを試みた。

研究成果の概要（英文）：In this study I consider the state of ego as the subject which is related to the world. For this purpose I mainly employ the phenomenological approach. In addition to that, I introduce the results of the analysis of the indexical “I” in analytic philosophy into this study. Thus I try to clarify the state of ego from various angles.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	990,000	297,000	1,287,000
2009年度	1,010,000	303,000	1,313,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,000,000	600,000	2,600,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：哲学 ・ 哲学・倫理学

キーワード：自我、自己知、他者、世界

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、フッサール現象学を主な手掛りとして、自我の存立構造に関する考察を行ってきた。その過程で、フッサール現象学での分析には、言語的な観点からの考察が不足しているという問題が浮上してきた。フッサールは自我の構造を「匿名性」や「自己触発」等の概念を用いながら記述しているが、

それらが自我の存在様式の特性であるならば、その構造は「私」という言葉の日常的な用法のうちにも暗黙のうちに反映されていると考えられる。このことを明らかにするためには、「私」に関する言語的分析が不可欠である。また、「私」のいかなる用法のうちに匿名性や自己触発といった構造が看取されるのかを解明することは、フッサールの自我理論にさらに具体的な内実を与え、それ

を明確化することに繋がるはずである。そこで研究代表者は、現象学的分析におけるこの点の不足を補うために、分析哲学における言語分析の手法を取り入れることを企図し、本研究を着想するに至った。

2. 研究の目的

本研究の目的は、現代哲学の二大潮流である現象学と分析哲学においてそれぞれ展開されてきた「自我」論の成果を融合して自我の統一的な基礎理論を構築するという最終的な目標に向けて、そのための基盤を形成することである。具体的には、現象学的な観点からなされる自我論の成果を明確化して再構成しつつ、そこから獲得される成果と、分析哲学で展開されてきた言語的な観点からの自我の分析の成果との関連を探り、後者を前者に取り入れていくことによって、現象学・分析哲学双方の自我論の融合を試みる。

3. 研究の方法

本研究では、現象学における自我理論の成果の明確化を行う作業と、分析哲学における指示詞「私」に関する理論の内実の検討を並行して進めた上で、双方の視点を取り入れて自我の存立構造に関する考察を行う。

現象学的自我理論の明確化の作業のためには、フッサールが行った自我に関する分析をカント、ハイデガー、メルロ＝ポンティ、アンリらが展開した自我および自己触発に関連する議論と関連づけながら考察することが有効であると考えられる。さらに海外のアーカイブ・図書館を訪問して資料を閲覧・収集し、フッサールの未刊草稿等の文献をも参照することによって、新たな視点から現象学的自我理論を再検討することが可能になると考えられる。また、分析哲学における「私」の分析に関しては、まずその分析の一つの源流になっているワイトゲンシュタインの議論に着目し、その内実を検討していくことが重要な課題となる。その上で、特にカスタネダの理論を中心として、分析哲学における指示詞「私」の分析の展開に着目し、その意義を明らかにしていく。

これらの方法により得られた研究の成果に基づいて、現象学的自我理論と分析哲学における成果との関連を探っていく。

4. 研究成果

本研究では、現象学的自我理論と分析哲学における自我の分析との関連性を明らかにするという目的のもとで、まず現象学的自我理論の明確化を進めてきたが、その過程で明らかにされるべき事柄として次の課題が浮

上してきた。第一の課題は、他者との関連からとらえられた自我の存在様式について考察し、自我が持つ「唯一性」という特性を明確化することであり、第二の課題は、そもそも自我が世界と関わるとはいかなることであるのかを明確化することである。そこで、それらの課題について、それぞれ考察を行った。

第一の課題については次のように考察を展開した。ここでは、フッサール現象学における他者論を再構成しつつ、その多様な議論の中から四つの階層—(1)ある物体的振る舞いのうちに直接的に他者を見て取ること、(2)自らを置き入れるような仕方では他者の体験を共遂行すること、(3)他者の体験および他者を反省的に対象化すること、(4)他者の唯一性を理解すること——を取り出し、それぞれの内実について検討した。そして最終的に、フッサールの見解をさらに徹底化することによって、自我の唯一性と他者の唯一性の間の動的な関係を開示することを試みた。

〈私は世界およびあらゆる他者に対する主観（主体）である〉という見方を保持するならば、「私」にとって「私」と他者が同格の主観であることを否定せざるをえなくなる。このことは、「私」が他者には譲り渡すことのできない唯一性を持つという見解を導く。そして、この「私」の譲渡不可能な唯一性の理解こそが、それと同様の唯一性を持つ他者の理解を可能にする前提であると考えられる。すなわちその際に他者は、「私」と同様に、他の同格の主観の存立を否定せざるをえない立場に到達しうる主観として、また他者にとっての自己自身の唯一性を自覚しうる主観として理解されることになる。だがこのことは、唯一性の自覚が固定化された静態的なものではないということを意味している。主観としての「私」の独特な立場と、それが持つ唯一性を理解するためには、それが他者へは譲渡不可能であるという見方に没頭してはならない。だが、この唯一性を理解することは、すでに述べたように唯一性の他者への譲渡可能性を開く。そして他者の唯一性が認められるときには、「私」の唯一性が譲渡不可能であるという見方は解消されることになる。したがって、「私」の唯一性は、常に確認し直されることを要請している。このように、自我の唯一性と他者の唯一性の理解は決して固定化されたものではない。それは、常に更新を要求するものなのである。なお、この研究成果は、日本現象学会第30回研究大会において発表されると共に、論文「他者と唯一性—フッサールにおける他者問題の諸層」（査読有）としてまとめられ、『現象学年報』第25号に掲載された。

第二の課題については、次のように考察を

展開した。自我は、常に世界との関連のもとにあるものとして考えられる。だが、この関連の様態は必ずしも明らかではない。自我の存在様式を明らかにするためには、自我が世界を持つということの内実を検討する必要がある。そこで、この点に関連して、自我が世界へと関わるための可能性の条件と、自我が持つ世界への関連の特徴という二つの視点から考察を行った。

ここではまず、研究代表者のこれまでの研究に基づきながら、それを徹底しつつ、自我が世界へと関わるという事柄と、その関わりの主体としての自我の成立の条件について考察を行った。フッサールはいくつかのテキストで、自我が世界へと関わる主観として成立するための条件を求めることによって、自我の存在様式を解明しようとしていたと考えられる。そこで、ハイデガーのカント解釈および「超越」をめぐる議論を手掛りとして、フッサールの「再想起」に関する議論を徹底化することによって、「〈未来への関与〉」という事象を特徴づけた。この事象が、そもそも世界への関わりが成立し、またそれによって自我の自己性が成立するための可能性の条件であると考えられる。なお、この研究の成果は、論文「自我と「未来地平」—フッサールの「再想起」論をめぐる—」（査読有）としてまとめられ、『実存思想論集 XXIV 実存と教育』に掲載された。

次に、フッサールとハイデガーの思索を手掛りとして、私たちが〈生きている〉ものを把握する際の様式に注目しつつ、人間が持つ世界への関連の特徴を浮き彫りにすることを試みた。まずフッサールの他者論に着目し、そこで示される人間と動物それぞれの把握様式に関する分析を検討した。簡潔に言えば、フッサールの議論によれば、動物と人間の把握は基本的には同型であり、動物と人間はそれらが示す振る舞いに基づいて把握されることになる。この主張は、日常的な動物の把握の説明としては妥当である。だが、動物は、人間と同質なものであると同時に、異質なものであるという意味を含んでいると考えられる。そこで次に、ハイデガーが 1929-30 年冬学期の講義『形而上学の根本諸概念——世界・有限性・孤独』で展開した思索のうち、「世界」に関する議論を検討し、そこで人間と動物の生のあり方がいかに特徴づけられるのかを明らかにした。ここでは、ハイデガーの分析を手掛りとして、人間と動物が周囲の環境世界に対して関係する様式の相違を際立たせ、動物の独自のあり方としての「とらわれ」の内実について考察した。人間の振る舞いの類型から大きく外れた振る舞いを動物が示す際に、私たちは動物を、何かに「とらわれている」という様態にあるものとして把握する。だが、この動物の「とらわれ」は、

人間が何かに心を奪われ、とらわれているといった状態とは異なっている。動物の「とらわれ」は、人間の「とらわれ」のような一時的な状態ではなく、動物の本質的なあり方として理解されねばならない。またこうした動物の存在様式から、逆に人間の存在様式の特徴も照射されてくることになる。人間は、動物とは異なり、或るものを或るものとしてとらえ、それに対して態度をとることができる。このことは、人間の自己性の前提となっている。人間の自己性は、他のものが「或るもの」として対立してくる可能性が開かれることによってはじめて成立する。この「として-構造」を前提として、人間の自我が世界を持つと共に自己性を持つということが可能になると考えられる。さらに、人間の自己性の特徴は、自己が持つ世界と自己性とを考察の主題へと引き出し、動物のあり方と対比することができるという点にある。このことによってこそ、人間が動物に特有の「とらわれ」というあり方を理解することも可能となる。このように、或るものを或るものとして把握する可能性、さらにはそれに基づいた自己主題化の可能性に、人間の自己性の特徴が見出されるのである。なお、この研究の成果は、論文「〈生きている〉ことの了解と自己性—〈生〉の意味に関する現象学的解釈—」（査読有）としてまとめられ、『死生学研究』第 12 号に掲載された。

これらの研究と並行して、本研究では、主に分析哲学で展開されてきた「私」に関する言語分析の成果に着目し、その内実の検討を行うと共に、現象学的自我理論との関連性を探ってきた。まず着目したのは、ウイトゲンシュタインによって展開された「私」の「客体としての用法」および「主体としての用法」に関する分析である。ウイトゲンシュタインは、前者の用法が誤りの可能性を持つのに対して、後者の用法にはそれが無いことを指摘する。そして、「私」という言葉に、それを話す人物や身体を指し示すのとは異なった用法があることを示唆するのである。さらにこの点に関連して、カスタネダによる「私」の分析を中心として、分析哲学における議論に着目した。カスタネダは、「私」という言葉が対象を指示する仕方に関して、他の指示詞に対して存在論的な優位性や認識論的な優位性を持つことを指摘した。これらの見解は、現象学的方法の根幹に位置づけられている体験の内在的知覚（反省）の特性に関連している。この「私」の用法に関する分析を手掛りとすることによって、現象学的に記述される体験の把握が持つ特性を、具体的な言語使用の観点から開示することが可能となる。またカスタネダは、指示詞による指示がその都度の指示詞の実際の使用に応じて確定することを指摘し、「私」による指示もまた固

定的なものではないことを示す。こうした議論と、現象学で論じられる自我の匿名性をめぐる議論との関連性と差異について考察することによって、現象学的自我理論で明らかにされる自我のあり方に更なる内実を与えることが可能となると考えられる。研究代表者は、こうした研究の成果を論文などの形でまとめ、2010年度以降に発表する予定である。

以上のように、本研究では、現象学的自我理論の明確化を行いつつ、それと並行して、分析哲学における「私」をめぐる分析に焦点を合わせて検討し、両者の関連性を解明するための基盤を形成する作業を行った。その成果は、すでに発表した論文等の他に、新たに公表が決定しているものを含め、2010年以降に論文・図書・学会発表等の形で発表していく予定である。研究代表者は、これらの成果が、現象学的分析と言語分析との融合による自我についての哲学的考察を前進させ、自我の存在様式を多角的な観点から把握するために貢献するものであることを確信している。

さらに本研究の成果を発展させていくことによって、研究代表者は、研究の射程をロック以来の人格同一性の問題や、アンスコム、フランクファート、テイラーらが展開した行為主体の自己知の問題、倫理学における責任主体の問題などにまで波及させていく予定である。これらの領域で現象学と分析哲学の知見の統合を試みることは、最終的には「自我」および「人間」の存在様式を知識および行為という両側面から総体的に捉えることに繋がると期待される。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 吉田聡、他者と唯一性—フッサールにおける他者問題の諸層、『現象学年報』、査読有、第25号、2009、pp. 99-106
- ② 吉田聡、〈生きている〉こととの了解と自己性—〈生〉の意味に関する現象学的解釈—、『死生学研究』、査読有、第12号、2009、pp. 94-121
- ③ 吉田聡、自我と「未来地平」—フッサールの「再想起」論をめぐって、『実存思想論集 XXIV 実存と教育』、査読有、第2期第16号、2009、pp. 117-133

[学会発表] (計2件)

- ① 吉田聡、他者と唯一性—フッサールにおける他者問題の諸層、日本現象学会第30回研究大会、2008年11月8日、専修大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

吉田 聡 (YOSHIDA AKIRA)
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：90451781

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：